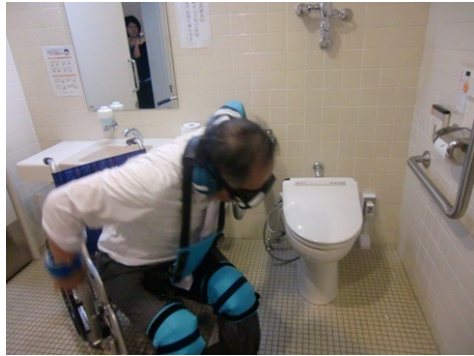


「誰もが安心して使える施設」と実態調査

日本共産党市議団

日本共産党議員団は6日午後、市内の公共施設のユニバーサルデザイン状況視察を行いました。この日、視察した施設は文化会館、市役所、市民プラザの3か所です。初めての取り組みということもあって上越市社会福祉協議会地域福祉課の佐藤貴規さん、常田紘子さんから指導を受けました。

調査にあたっては、高齢者疑似体験用の装具を身につけました。両足にそれぞれ1キログラム、両手首にそれぞれ500グラムの重りをつけ、ヘッドホン型耳栓、視野を狭くするメガネを着用、さらに背中を強制的に曲げるものをつけて2時間動き回りました。場所によっては車椅子も使いました。正直言って、くたびれ果ててしまい、年をとってから動くということがどれほどしんどいことかよくわかりました。



動き回る中でわかったことがいくつもありました。そのひとつは車椅子に乗った時に使いにくいこと

ろがあることです。文化会館のエレベーターは乗り降りするには入口が狭く、ぎりぎりだと感じました。また、トイレを利用するには慣れないと使いにくいですね。引き戸を開ける、トイレで車椅子から便座に乗り換える、こういったことをスムーズにできるようにするには訓練が必要だと思いました。文化会館の1階ロビーから中ホールへ下りていくスロープ、これも車椅子に乗せてもらい上り下りしましたが、ちよつと狭く、勾配が急だと感じました。

怖いと思ったのは市民プラザでエスカレーターを使って下りるときでした。強制的に腰を曲げていたせいなのでしょう。エスカレーターは動きがとて速く感じられ、乗る時にタイミングを外すのではないかと不安感をおぼえました。上り下りする時にはアナウンスが流れているのですが、耳が聞こえにくくするヘッドホン型耳栓（みみせん）をつけていたためか、それともエスカレーターに乗ることに集中していたせいなのか、まったく聞こえませんでした。

この日の体験・調査は議員団で23項目の改善要望としてまとめ、11日、自治市民環境部の布施良之共生まちづくり課長に提出しました。この内容は後日、お知らせします。

日本共産党議員団では今後もこうした調査を広げ、水族館、公民館、図書館、リージョンプラザなどでも行う計画です。調査の結果は関係機関、施設に提言していきたいと考えています。

シリーズ 上越市内の橋

第39回 春日橋

「春日橋」と書いて「かすがばし」と読みます。春日神社の参道にあり、春日山城跡を望めます。赤い欄干が目立ちますが、高欄にはシカや鳥などのレリーフが埋め込まれています。これは「シカに連れられた」という春日神社の由来に基づくものだそうです。実際、戦前には近くにシカもいたとか。橋長は約10m。竣工は1997年（平成9年）の8月です。



啄木の魅力を豊かに語る講演に感動

国際啄木学会前会長の近藤典彦先生が吉川区に来られ、「石川啄木を呼ぶ時代」と題する講演をされました。

「啄木は短歌、詩、小説、評論だけでなく、時代を代表する思想家でもあった」として近藤さんは、啄木の「時代閉塞の現状」という小論などを引用しながら、時代を鋭く分析した啄木の思想と文学を紹介しました。

講演を聴いた人たちは、「あらためて啄木のすごさを感じた」などとのべていました。



橋爪のりかずの
市政レポート

NO 1449
2010.5.16

発行・編集 日本共産党上越市議 橋爪法一
Tel 548-3628 (有線) 4867
E-mail hasiznyg@ruby.ocn.ne.jp
URL http://www.hose1.jp/

『「五センチ」になった母』出版記念会を8日、スカイトピア遊ランドで開いていたいただきました。会には、出版関係者、親戚、同級生、友人、議員仲間など57人の方々が駆けつけてくださいました。

出版記念会の第1部は『「五センチ」になった母』を語る会です。

最初に山岸行則議長、中野敏明教育長からお祝いの言葉をいただきました。亡くなられたお父さん（元民生委員）から聞いていたという「ホーセ（わが家の屋号）の子どもたち」についての中野教育長の話には胸が熱くなりました。地域の民生委員さんが私たち兄弟の生活ぶりにまで目を向けていてくださったとは知りませんでした。山岸議長と中野教育長の心のこもった話のおかげでこの会のいい流れが出来たように思います。

続いて、出版にかかわった人たちが次々と発言。出版元である同時代社の川上社長は「横からの温かい視線がいい」「ほとんどの話を3ページに削り込んでまとめたところがよかったです」などと評価してくださいました。カバー写真を提供してくださった吉川区在住のカメラマン平田一幸さんは、「まだタイトルも決まっていな階段で40万枚のカットのの中からツクシ



参加者みんなが

故郷・家族を思い、笑顔

の写真を選んだのは、橋爪さんを中心に支え合って生きている様子であらわしていると思っただけから」と思いを語ってくださいました。平田さんはこの日も朝4時過ぎに起きて10時頃まで写真撮ってきたとのこと、夜明け時の霧はオレンジ色に輝いていたといいます。ふるさと吉川の写真を撮り続けるカメラ人生にもふれた話にひきこまれました。

本に登場している人を代表して畠山繁さんが「晴れ姿」（本の中の一篇）について語ってくださいました。畠山さんは20数年前、風邪から脊髄炎になり数か月の入院生活を余儀なくされました。その入院生活中に娘さんである由紀ちゃんが新潟日報に「わが家のお父さん」について書いたのですが、畠山さんからはその記事を探し出すまでの経過など私の取材と文章のできるまでをリアルに紹介していただきました。



語る会での発言はそれぞれ印象に残るものだっただけに心配だったのは私の挨拶です。この日の朝、妻が体調を崩し、それが気になり、自分の挨拶はまったく準備できず壇に上がりました。

て、「随想は書きたくてたまらなくなった時に書いていく」「どの家庭でもいいことばかりではないが、わが家も同じ。随想は心にふれたことを書くようにしている」ことなど思いつくまま語りました。まとまりのない挨拶でしたが、途中で身長140センチ弱の母を紹介したことで大きな拍手をいただきました。

第2部は出版祝賀会。吉田侃議員やひ子先生、柳川月さんなどが次々と心温まる話や平和への思いを語ってくださいました。会を一段と盛り上げてくれたのは朝日池総合農場の平沢栄一さんとトマト農家の山岸協慈さんの歌です。「百姓99」「久比岐の里」など数曲を見事に歌い上げ、最後は参加者全員による「ふるさと」「北国の春」の合唱をリードしてくださいました。

記念会開催にあたっては大勢の皆さんからご協力いただきました。感謝申し上げます。

注目! 郷土関連本のご紹介

「5センチ」になった母 橋爪 法一著 1,000円
同時代社

著者の橋爪法一さんは、吉川区の出身で現在上越市議会議員をされている。その活動報告「市政レポート」の中に書かれた随想シリーズの中から50話を選んでまとめたものが本書だ。前書「春よ来い」に続くシリーズで、日常で体験する家族の出来事などを優しい言葉で描き出している。

特に介護を経験された方には、うなずきながら読まれる描写が多く、私も昨年亡くなった父を思い出しながら読んだ。初めてデイサービスに出すときの不安な気持ち。家族の介護のさなかに先立って行く親戚の叔父・叔母。昨日の事のように読んだ。深夜の午前4時頃大音響でラジオの音が聞こえてくる父の部屋では、本人は大音響にも関わらず眠っていた。それが本書に出てくる「にっぽんの歌こころの歌」だったのかと分かったとき、老いていく親と一緒に暮らしている家庭では、みな似たような経験をしていたのかと、不思議な安堵感も感じた。

飾らない日常を、飾らない言葉で坦々と描き出す橋爪さんの随想には、上越に住む人の優しい息づかいが感じられて、安らいだ読後感が味わえる世界があった。

